

足音を聞きながら

岐阜県

佐藤 隆定

入園式の日、満開の桜に張り合うように全開の口で泣き叫んでいた息子は、やはり翌日から保育園に行くことを嫌がるようになった。三歳ながら末恐ろしいほどの頑固者で、嫌なことは断固として拒否する性格である。朝車に乗せようとしても、乗りたくない車になど当然乗るはずもない。無理やり押し込めば自分で鍵を開けて無理やりにも降りようとするから、とても運転してられない。

困り果てた末に妻と共に導き出した解決策は「どうにか説得を試みる」という無策に等しいもの。園には子どもが乗れるほど巨大なリクガメが飼われているから、そのカメを見に行こう。園庭にある滑り台で遊ぼう。裏手に広がる墓道を散歩しよう。何でもいいのだ。

とにかく保育園に行きたくなるような提案を、身振り手振りを交えて試す日々となった。奏功して車に乗っても、行く道すがら息子はぐずりだす。幸いにも通園路のほとんどは田んぼに面していたから、車一台が停まれるぐらいの畦道はいくらでもあった。田起こしされ水張りを待つ田んぼの脇を、葦牙の芽吹く小川など眺めつつ、何をするでもなくただ手をつないで散歩する。草木が萌えて、あらゆるものが伸び開いている。この子もそうられるだろうか。焦っているわけではないのだが、息子がどう感じているのかが気になった。

だから入園から二週間ほどが経ったころ、帰りの車の中で訊いてみた。楽しかったかと。うん楽しかった、という言葉が聞けたらどれほど安心できるか。しかし息子はしばらくして「失敗しちゃった」と呟いた。思いがけない返答に何に失敗したのかと訊くと「泣いちゃったから」という悲しい声が出た。

泣かないで保育園にすることが成功で、泣いてしまうと失敗。誰から言われたわけでもないだろうに、そう感じながら不安な毎日を泣かないように精一杯頑張っているその小さな姿を思うと、涙が出そうになった。

泣くことは失敗やないよ。泣いていいんやからね。心配せずに遊んでこやーね。己の言葉の非力さを呪いながらも、言葉が溢れた。息子は下を向いたまま小さく頷いていた。

保育園が嫌いなわけではないのだと、そう考えるようにしたのはこの頃からだ。「いやだ、帰る！」とぐずるのだから当然保育園に行きたくないのだと思っていたが、そうとは限らない。本当は明るく登園したい。友達とも元気に遊びたい。けれども不安で寂しくて恐くてなかなか足を出すことができない。言葉で気持ちを上手く表現できないがために、結局「いやだ、帰る！」になるのではないか。ふかふかと水面に浮かぶ発砲スチロールのように、その考えはやがてくつきりとした輪郭をともなつて脳裏に漂い続けた。

それからは息子を抱きかかえて教室に連れて行くような力技は止めにした。早めに家を出て息子の足が自然と教室に向かうまで、一緒に保育園の周りを散歩するようにしたのだ。園の裏手には墓地が広がっている。墓石の間を二人で歩き、立ち並ぶお地藏さまに「おはようございます」と挨拶し、二回目に前を通ったときに「いってきます」と頭を下げることが日課になった。そうやって三十分ほど歩き回っていると、息子は小声で「そろそろ行ける」と言っただけ顔を上げるのだった。

ぐずぐずの雲もいつかは晴れる。光が差し込んだのは、四月も終わろうとするある日の朝だった。保育園へと向かういつもの車の中で、息子が突然「今日ね、階段一人で上がれるよ」と宣言したのだ。息子のいる年少の教室は階段を上がった二階にある。慣れた子どもらは階段を一人で上がって教室まで行ってしまふ。親は玄関からその後ろ姿を見送り、子どもが階段の踊り場を過ぎて姿が見えなくなると帰っていく。そんな光景は自分らとは無縁のものだと思っていたから、息子が急に一人で行くと言いだしたときは驚いた。

本当に一人で行けるだろうか。手をつないで玄関に向かう間、妙な緊張感が背中に貼りついていった。玄関をくぐり、脱いだ靴を下駄箱に入れて戻ってくる息子に合わせて階段に近づく。すると息子が私の正面に立ち「パパは待って」と制し、一人で階段を駆け上がった。そして踊り場まで上がると、振り返って自慢気な笑みを湛え右手を突き上げ手を振った。戸惑いつつも、いつてらっしゃいと、私も手を振った。残り半分の階段を駆け上がったいく元気な足音が聞こえた。

我が子が笑顔でいる。たったそれだけのことが親にとっていかに嬉しいことか、このときほど身に沁みた瞬間はなかった。ついこの間まで、教室に着いた息子は寂しげな表情で泣きべそを掻きながら抱っこを求めている。そんな息子を残して家へと帰る車の中、教室で笑っている息子の顔がどうしても想像できなかった。それがこの日は違った。友達とじやれ合い、飛び跳ねて笑う息子の明るい笑顔が、自然と目に浮かんできたのだった。